

# 令和3年度（2021年度）事業報告

鮎川正（記）

## はじめに

コロナ禍の中でも教育・保育を安定的に継続していくことを今年度も主眼に置きながら、令和3年度も木の花暮らしを続けてきました。特に年明け以降、オミクロン株の全国的な感染拡大の中、県内でも1日500人を超える日も続き、まん延防止等重点措置が三度、1月下旬から施行しつつも、感染状況は収まらず再延期に及んでいます。特に昨夏のデルタ株以降、変異株により低年齢層にもコロナ感染が拡大、小学校はもとより幼稚園、保育所、子ども園などでも感染者やクラスターが相次ぎました。市内でも休園する園が3学期に入って続く中、木の花は幸いにも休園にもならず、どうにか木の花暮らしを継続できていることは、教職員の努力もさることながら、家庭の協力を負うところが非常に大きい、と言えます。子どもたちの園生活を止めることなく（中断することなく）、継続できたことに、家庭の皆様にはこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。

一方コロナに目を奪われがちですが、少子高齢化、人口減少時代に直面している日本では、就労家庭の増加が進み、また幼児教育・保育の無償化という子育て支援の施策も重なり、待機児童問題から**施設の供給過剰の時代へ、子どもの受け入れ先の施設の選別（淘汰）の時代**になりつつあります。同じようなことは教育・保育施設に従事する保育者にも言えます。学校教員の不足が言われ、その労働環境の劣悪さがクローズアップされていますが、人材不足が言われているのは幼児教育の分野も一緒です。保育現場の処遇改善もようやく行政を動かしつつありますが、キャリアアップが処遇改善の実利と合わさることで保育の現場も、施設間移動（転職）がより活発化、今後ますます有為な人材不足が予想され、働き続けたい環境を如何に整え、自園で保育者を育てていくのか？が問われてきます。

このような時代背景を見据えながら、コロナ禍の中で教育・保育の継続を図り、さらに**コロナアフターの時代の行事の在り方を、保護者との協働、地域の協力関係の中で模索し、木の花らしい幼稚園由来の園として1歳から6歳までの子が集う子どもらしい生活の場の創造、その分かりやすい発信**も求められています。サポーターも含めた多様な人材を裾野に広げつつ、新たな若い世代の保育者が安心・安定して木の花の教育・保育に没頭できるようなスタッフ体制、職場環境の在り方も大きな課題です。これからの**子ども園としての体制整備と将来像を描きつつ、スタッフ一人一人もそれぞれのカラーを発揮して園と共に成長を実感できる体制づくり**を目指し、今年度も前年度の4つの重点を引き続き、その改善、向上を図ってきました。以下その報告の概要です。（全体的な教育・保育活動は『2021年度特色教育事業』を参照ください。注1）

- ① 感染状況に応じた対策の強化をメリハリ付けて行いつつ、コロナ対応を前提に安心・安定した園運営の継続と今後の保育形態、行事の見直しを図る。
- ② 木の花版の3歳未満児保育の在り方を模索し、以上児での集団生活としての幼児教育（木の花暮らし）との接続を図る。
- ③ 子ども園としてのこれからの教育・保育・子育て支援等の全体的な運営の在りようの見直しを図る。
- ④ これからの時代に対応できる、働き続けられる、キャリアアップできるスタッフ体制整備と世代交替、木の花保育の継承を図る。

## 令和3年度事業計画の重点

1. 新型コロナ対応の安心・安定した園運営の継続
2. 木の花版3歳未満児保育の課題改善
3. 日常生活と年間行事の在り方の見直しと再編成
4. 新時代に対応できる多様な協働的スタッフ体制の構築

### 1. 新型コロナ対応の安心・安定した園運営の継続

コロナ禍は予想通り2年目も続き、4月下旬から5月にかけての第4波、7月～8月、9月の第5波、そして年明けの1月下旬～2月、3月にかけての第6波と、変異株の登場により感染者数の波は徐々により大きくなってきました。県も3度のまん延防止等重点措置を適用して対応にあたってきましたが、第6波のオミクロン株の登場で10歳未満の罹患者が激増、幼児教育・保育施設はかなり対応に苦慮しているのが現状です。園では昨年度に引き続きコロナ対応できる安全管理の体制（ソフト&ハードの両面）を図り、コロナに関する最新の知見、感染状況の情報を収集し、関係機関、園医をはじめ有識者との連携も密にしながら、感染状況に応じたレベル別対応を強化し、家庭にもその協力を呼びかけて、園内対応、保護者対応など緩急のメリハリを利かせて、教育・保育の継続を続けて参りました。

#### <1> 園運営上の安全管理対策

##### 感染状況に応じたメリハリと関係者との連携・・・

基本的には前年度コロナ禍を振り返り、コロナ対応は長期にわたる対応のため、感染予防（拡大防止）効果と合わせてスタッフの労力（モチベーション）等も勘案し、投下するエネルギーの集約のポイントを感染状況のレベル別でメリハリをつけることでその徹底と緩和のバランスを図りました。各種安全対策の基準、指針、新型コロナ対応マニュアルの見直しやレベル別園内チェックでの園生活の安全確認の内容の共有を図りました（日常生活のほか、クッキング、遠足等、活動のあり方など）。また職員出勤規定の弾力的な運用により、本人のみならず家族の健康状態も含めたコロナ特別休暇をレベルに応じて弾力的に運用し、職員が休みやすい体制の在り方を職員間で共有し、相互扶助で乗り切っていくことを心掛けてきました（サポーターさんなどの保育あるいは調理などの代替機能もフル稼働で対応）。また園医さんによる、サポーターも含めたワクチン接種、コロナに関する知見、情報提供（特に身近な具体的な事例にどう対処するか？など）、あるいは学校薬剤師さんによる園空間における園児、職員などの人数比と二酸化炭素の排出量の測定に基づく、換気度合いや方法などの助言等との連携協力も仰ぎました。

##### 換気対策を徹底しつつ・・・

とりわけ各種感染対策の中でも主に換気対策を徹底し、冬であっても定期的な全空間の全面開放の換気を図ると同時に遊び場や活動が密にならない空間を最大限活用して、万が一の想定に備えてきました。園の「水際」対策としては、新聞記事や県HPのコロナ感染状況などによる情報収集によるコロナ理解と感染状況をリアルタイムで把握しつつ、保護者向けコロナ対応のお便りを随時発行し（R4年3月7日現在 コロナ対応23号）、各家庭においても周囲にアンテナを張ってもらいながら、レベルに応じて園がお願い、協力して欲しい事柄を明

示し、園の日常の保育、年間の行事など様々な面で協力を得てきました（玄関に保護者会役員さんが分かりやすい表示も作ってくれました）。夏場の第5波では、預かり時間のお迎えをレベルに応じて玄関の密を避け、園庭からの保護者の出入りを促し、園舎内への保護者の出入りを禁じる一方でその際に遊びの見える化を図り、「見えない」ことへの親の不安意識を和らげてきました。また登園降園の際の保護者によるタッチパネルでのチェックにより、園児の出欠状況をリアルタイムで把握できる安心・安全上の課題改善を図りました。これは職員負担の軽減にもつながっています。



登降園タッチパネルの下にイラスト(あまびえ)付きでお願い事項を簡潔に表示。

### その他の安全対策も一緒に・・・

またコロナ禍を機に、各種安全管理上の課題にも取り組んできました。例えば、**早番・早二番等のローテーション体制の見直し**を図り、スタッフ同士の安心感・親の安心感に繋げたり、あるいは**延長預かりの空間分散化(1, 2階の分散)**を実施し、ぐみの子にとっての安心感とどちらに行ってもいいという緩さの中で、ぐみ棟の中で異年齢と一緒に生活する時間帯においても密を避け、色々な子に対応してきました。

また地域の感染状況の把握が可能な**地域サーベイランス運用に登録**し地域の感染状況の把握を得たり、安全管理マニュアル、学校安全計画等の見直しを図り、コロナ以外にも、事故や地震、アナフィラキシー、熱性けいれん等の**緊急時の状況別のフローチャート化**などを作製、園内スタッフ間で、もしもの際の手順のわかりやすい共有化を図りました。併せて昨年度から安全教育としての各学年別の**緊急時等における子どものねらいと指導実践、その振り返りを継続**。避難訓練等の際に子どもの適正行動等の把握と指導に努めたり、グループクッキングの健康チェックを行うことで、子ども自身の意識喚起につながるなど、**子どもたち自身にもコロナ時代を生きる様々な安全への自覚が伺えるような姿も見られました**。

### ICTを活用、リモートにも挑戦・・・

またコロナ禍を機に**職員会議を職員室のみで行わず、空間を分けて ZOOM 会議を開催**したり、職員の自宅とつなぐ会議なども試みてみたり、ICT が苦手な木の花においても新時代に添う対応にもチャレンジしました。そのステップを踏まえて感染状況が収まらない時期には**ZOOM のビデオトークなども実施**。職員間の活用では、緊張感がある、いないスタッフも話し合いに参加できるなどの可能性を実感し、保護者とのビデオトークでは、マスクなしで表情がわかり手間がいらない、気楽に喋れるなど親の評判もいい、との振り返りで感触も得られました。これらはひとえに ICT サポーターさんの手助けがあってこそです。**保育補助、調理補助など多くのサポーターさんの支えもコロナ禍の教育・保育を支える大きな糧**になってきました。本当に感謝です。

## < 2 > 教育・保育活動上の柔軟な取り組みと年間計画

### 苦渋の決断を次に活かす・・・

一方、コロナアフターを見据えた行事形態の見直しは前年度同様に継続。創立記念日では保護者無しで園空間を全体に活用し、子どもたちも親向けを意識せず園に対してお祝いをする意識で様々な表現活動に取り組みました。夏場の感染拡大(第5波)を受けて**苦渋の決断で同窓会、夕涼み会の中止としつつも、夕涼み会での**

運動会に夕涼みの会係さんの神輿も登場!

盆踊りを盛り上げる……。



盆踊り、保護者会（夕涼み会係）の用意したモノ（神輿）やゲームなどは運動会や木の花祭りなどに織り込み、取り組みが活きるように配慮しました。また運動会の地域開催は、今年度も地域の人に練習風景をみってもらうことで地域の人に知ってもらうきっかけになったり、子どもたちも地域との交流や地域を意識したり、川遊びのおまけがついてくる、というモチベーションにもつながり、頻繁に荷物を持って（担いで）歩くこともいとわず、子どもたちの体力アップや協調性アップにもつながりました。また、木の花祭りの分散開催では、犀川神社のご協力も得て、神社でのお祭りのイメージで運動会から木の花祭りにも繋がっている取り組みを行い、地域の方々との交流や学年分散ゆえにお店に買い物に行ける醍醐味、年長・年中の縦割りの店での交流にもなりました。異学年での子ども同士のつながりを生み、分散してお店の取り組みが続くことでぐみにとっても目につきやすく刺激になりました。

### 環境に影響され、逆境が子どもたちを強くする……

運悪く地域での開催では悪天候に見舞われ、天候等の対処など課題もいくつか挙げられますが、子どもたち自身がそうした悪条件下でも、お店の商品を守ったり、神棚へお参りにそっと抜け出して出向くなど、「逃げる」ではなく、「立ち向かう」姿勢を終始、持ち続けていたことは特筆すべきことと思います。

またクリスマス会では保護者向けに人数制限を行い、オンライン配信で代替しつつ、空間を広く活用しての子どもたちの音楽表現ができ、かつ音楽サークルによる歌、演奏での刺激が子どもたちにプラスに作用しました。

発表会は12月に行った、トップバッターの年中さんでは感染状況も落ち着いていたものの、舞台参加の保護者に限定し開催。舞台から階段踊り場まで広く子どもたちの劇の舞台として活用し、密を回避しながら実施。その後、3学期に入り年少発表会ははからくも開催できましたが、2月の年長発表会ではスタッフの自宅待機も入り延期を決断。3月に持ち越すことで子どもたちと再度気持ちをリセットして文集製作への活動を先行する対応で乗り切ってきました。（残念ながら年長保護者の出し物は、卒園式以降の日程でお楽しみ会として延期となりました。）

また2月のお茶参観（お茶会）においても年間を通じて年長のお茶の指導にあたってきた先生が日常的に通う施設でコロナが発生し、延期すべきか迷うも担任も腹を括り急遽お茶の先生抜きでの開催となりました。子どもたちはお茶の先生に頼ることなく、当日、自らお稽古を重ねてきたお点前をしっかりと保護者の方々に披露。自ら緊張感をコントロールしながら、自らの手でおもてなしをする気持ちを出しながらお茶会をお茶の先生の同伴なしでやり遂げました。

今年度の行事の取り組みの方向性はコロナアフター以降も継続していくことが、子どもたちの育ちにプラスに作用することが確認でき、教育課程や教育活動の中身についてもコロナ流行版からコロナアフターの次の時代を意識し、実践を通じて行事のありようを今後も進化させていきたい、と思います。

## 2. 木の花版3歳未満児保育の課題改善

### <1> ぐみの子どもたちの「見える化」

本園に行こう・・・

昨年度の職員たちの自己評価の振り返りで「ぐみの姿が見えない」、という課題がありましたが、今年度のぐみスタッフたちの方針として、「ぐみ棟に閉じこもらない」、「なるべく本園に」、を意識し、様々な機会を捉えて、空きスペースを活用して遊ぶ時間が増やし、本園（園庭含む）に行き来する生活を心がけてきました。それにより、怖いもの知らずに行動半径を拡げ、本園においても伸び伸びと遊ぶぐみの姿、自然とぐみが本園以上児の活動にも混じっている光景、本園にいたることが自然に感じられる、という本園スタッフの認識にもつながっていききました。

年中さんのお帰りのお集まりにちゃっかり混ざるぐみちゃんたち・・・。



### ぐみはぐみらしくそれぞれの世界を・・・

具体的にぐみの姿として、本園のホール、庭を独占的に使える中で伸び伸びと遊び込む様々な様子、道具の使い方や場所の在りかを熟知している姿（それも園庭の裏側のレンガ等の場所なども詳しく知っていて驚き）、等々以上児の遊びに入りこんでいる中で、色々なモノを出したり、自ら動かすなど、ぐみらしく、興味関心のままモノ使うなどの面白い様子も日常的に伺えました。また本園の活動状況（木の花祭りや発表会などの取り組み）を感じとるような姿も伺え、これは使ってだめなのかな？今はここでは静かにしていないと…などぐみであっても状況、環境に応じた遠慮や気遣いなども伺える様子も見られました。

また一日の生活の中で、昼寝のときに寝ない子が自然と本園や園庭に遊びにでてくるようになりました。これはスタッフ側の意識が無理に寝かせなくてもいいのでは、とより一人一人の子どもの状況に応じて対応しようとする意識の表れでもあります。昨年までは寝かしつけに力点があり、寝つけない子は意識的にスタッフが本園に連れていくという面もありましたが、今年は子どもの意思でどんどん出てきて、遊び込んでいるようになりました。個々の発達状況に照らし合わせて、昼寝の選択ではなく本園に混ざって意欲的に遊ぶぐみ（2歳児）の姿は年度後半にも増え、4月からの本園での生活のプレ体験にもつながっています。

### <2> ぐみ棟の空間・モノのより工夫ある使い方、取り組み

#### ぐみ棟の部屋チェンジ！

昨年度課題で挙げたぐみ棟空間の活用。そこで今年度は2学期に1,2階の部屋チェンジを行い、一定の成果を得ました。1歳児は、2階に替えてみると庭に出ていかない、高い空間から庭の様子を見ることで満足したり、また階段を登ったり、降りたりなどの行動自体が楽しい、やってみたい発達の欲求に応えられるようになってきました。また2歳児はお昼前後など時間も気にせず出入りがしやすい、子どもが主体的に庭や本園に出やすいなどのメリットがあり

二階の広い部屋を1歳児が思い切り満喫・・・



ます。空間的な使い道として、年齢で区切るだけではなく、使用目的として、1階で食事をとり、2階に昼寝に行くなど目的別の活用なども試みつつあります。2歳児がプチと合同で本園に遊んだ後の時間差で1階で食事をとるなど、メリハリのある空間活用を試行中で、今後も階段や3階ミニホール？あるいはデッキ、屋上など様々な空間活用をさらに工夫したい、と思います。

### モノの活用、生活への自信・・・

またモノや遊具に関しては、本園での遊びの面白さ（叩くものなど・・・テーマ別の自由遊び指導計画の実践）を堪能するなど、本園側のモノのユニバーサルな使い方が以上児にも響いたり、以上児の使い方を盗んだり、またイスやテーブルを使って遊べるように活用する姿も見られました。

生活としては、コロナ禍を逆に**保護者の出入りがない分、自分自身で荷物を運んだり、朝の準備を自分でするようになったことも収穫**です。1歳の子でも2階へも自分で自分の荷物を運べるし、やろうとするなど、繰り返すことでそれ自体を楽しみ、自分のモノを自分で持っていくことで自信をつけてきています。自分のモノの意識が出る結果、それぞれの身辺自立が進んでいるようです。見通しを持つようになることで、着替え、排泄などの自立もさることながら、冷たい水でも大丈夫、手洗いが多くなりました。また2歳のごみ捨て当番など、ぐみ棟のごみを集めて、本園に行くきっかけにもなり、1歳の子もゴミ捨て当番に行きたい、という子も出てきているなど、**生活を通じて、より健康で安全な生活を創ることへの意識が芽生え、様々なことに挑戦するきっかけ**になっています。

またコロナ禍ゆえに頻繁に日常的な散歩を多くする一方、公共機関等を活用し遠足に行くことで、遠足の面白さ、ぐみの子ども達は歩ける（体力と意欲がある）、というのが実感として理解できたことも大きな糧でした。

### <3> プチとの交流+以上児との交流の工夫

#### 憧れの存在と共に・・・

昨年度は異年齢交流の課題も挙がっていましたが、ぐみと以上児との交流はスタッフ間でも意識的になり、特に創立記念日の取り組みでもあったまつくりの似顔製作の交流が繋がりのおかげに交流が日常レベルになってきました。まつくりさんがぐみの生活の手伝いに出向いたり、寝かしつけや着替え、お昼ご飯などのサポートを行ったり、密に関われる機会を設けました。ぐみの子らには**甘えを出せる場となり、まつくりの対人関係能力や自信**につながっています。

様々な行事を経て憧れが強まる様子もみえ、家でも年長の話を一っぱいするなど家庭での話も聞くようになった、とぐみスタッフは言います。またお泊り保育のおすそわけで刺激を受けたり（食事、プールなど）、運動会後のモノの使い方が上手くなったり、それを活用して遊ぶ様子も伺えました。年中発表会後のモノ（ありグッズなど）を今は使えない時間、見ている時間を経て、それを使える環境（アフター）が出来た時の遊び方がやりたい気持ちを爆発させているようです。そして次回の発表会（年少・年長）ではこんなものが使える、と発表会等の見方もより集中力が増してくる様子もみえ、本番を体験したのちに**実際にそのモノを使う体験、やることで見たことなども身体にすりこまれるような、そんな姿も伺えます。**



## 新たな同格の仲間として・・・

プチとの交流は、昨年度と異なり、少しずつプチ入園が進むことで何回もくりかえす交流となりました。そのことでお互いの顔を一人一人がじっくりと覚え、徐々にぐみの子にとってプチの認識が進む一方、プチにとってのぐみという遊び場、活動場所が徐々に慣れてきて、互いを意識するようになりました。

## そして課題も・・・

交流では年中との交流が少ない点の課題（一日入園の取り組み等で対応）、ぐみ棟の中での生活において、モノの用意がマンネリ（ぐみ棟）になっていないか？もっと空間での運動遊びの工夫も必要では？ 階段スペースや 3 階空間の活用の余地は？などの空間、モノの課題が挙げられたり、大人を取り合ってしまう点やどうしても赤ちゃん扱いしたり、以上児と交ざる際の安全面などを気に掛けるなどの課題も見えてきました。ここにはぐみを未



鬼除けになるかな・・・と、節分の取り組みでイワシの頭を焼くぐみ、ぷちちゃんたち・・・。

満児として一律に頭で理解しがちな弊害もその背景にあることが浮き彫りになり、ぐみの一人一人の学びの押さえどころがスタッフ全体に十分共有されていない点も課題として、今年度の振り返りで挙げられました。一人一人がどのような力を持ち、どのような方向性で伸びようとしているか？スタッフ全体での共有が十分に出来ていれば、ぐみの子が以上児に混ざっていても、この子はもう少し様子を見ておこう、この子には声をかけよう、など対応にも個別に配慮することが可能であろうかと思われます。そこで月ごとに一人一人の育ちを共有する機会を設け、ぐみの週案のオープン化（職員会議などを利用）で、一人一人の学び方向性と課題を共有する試みを始めることとしました。一人一人の育ちの力を押さえておくことで年少に進級した際のクラス集団としての編成や年少以降の活動の在り方にも白ベースではない、積み上げが期待できる、と思われます。

どのように一人一人が育ち、どのような力をどのようにつけてきたのか？こうした点を押さえたうえで入園から年少進級までの未満児の保育過程、年間の流れの中で保育計画の立案、保育過程をどう教育課程と結びつけるか？ という教育と保育との結びつきの関連性が見えてくるのではないかと考えます。

## 3. 日常生活と年間行事の在り方の見直しと再編成

### <1> 日常生活の見直しと再編

#### コロナ禍の新たな庭の拠点・・・

今年度の本園でのトピックとして年長児たちが春先に園庭での大穴を作った遊びが、新たな遊び場の拠点となり、年間を通じてぐみも含め様々な子が集い、遊びが広がる場になっていました。雨水が貯まることで大池に飛び込んだり、大きなプラケースを船にして浮かべたり、一本橋（びよんびよん橋）の設置で跳んでみたり、など様々な子が出会う、交流の空間になりました。（これは大雨の際の土砂がぐみ棟に流れることの「堰止め湖」としても機能しました。）

まつくり作の大穴。雨が降れば巨大な「大沼」に・・・



また園庭に「田んぼ」を年中児らが設置。田植えから始めて稲を育てる取り組みをしたことで、色々な子が稲の育つ田んぼを世話したり、覗きに來たり、年中児は稲刈り後も稲などをその素材を活かし木の花祭りの商品等に使うなど、様々な取り組みにも活用できました。またプールからの排水等が流れるホース水路もこちらに延ばして夏の炎天下の際の水補給を試みることで、涼を得る遊びも展開。園庭のまた別の新たな自然拠点ともなりました。

キエーロで土づくり。この土でぐみ棟前に花壇も出来ました。

園庭の遊び空間を年間を通じてこのような改造、展開ができるようになった背景には、コロナ禍ゆえの対応として運動会を園外、地域で行う、という見直しが寄与しています。



### 木の花版 SDGs と縦割り活動・・・

また環境教育の一環として、より意識的な木の花版 SDGs として、前述の2歳のごみ捨て当番であったり、キエーロ（コンポスト）の作業に意識的に以上児が手伝うようになってきました。これらはゴミの減量化、食品ロスの削減につながり、またキエーロから花壇の土に還元されるような循環も出来つつあります。環境への意識が子どもたちの中で少しずつ根付いていくきっかけになっていると思われます。

また異学年交流の一環として、縦割り活動において、年長・年中さんの2学年編成を今年度も継続。縦割り遠足なども体力ややる気なども息が合い、より深く遊びこめることができました。遠足ウィークであちこちに色々なところへいったことも、園児同士が園で話題にし合っていたり、お列のメンバー同士ということで馴染みやすいこともあり、お列そのものは、毎日出るメンバーは減っている課題があるものの、メンバー同士の繋がりは深まっているようです。（一方年少はプチ、ぐみ2歳児との2学年交流を意識的、日常的に実施。3学期後半はぐみ、プチ、年少でのグループ活動なども企画、実践中です。）

### 預かり保育での新たな生活作り事始め・・・

職員作のマイコート掛けに、お残りの時は自分の荷物をお片付け・・・

より幅広い異年齢交流としての預かり保育の在りようが人数増に伴い、課題としてここ数年挙がっていましたが、今年度は4時半時点でのお集まりを行い、ぐみ棟への移動（あるいは降園）という行動のメリハリ、生活の流れができてきたようです。また預りの荷物置き場としてのコート掛けを設置することで、荷物が階段に並びどれが自分のモノか？判然としない状況から、自分で意欲的に自分の場所にかけて、忘れ物、落ちているモノが減り、子どもが自分自身で荷物を管理できるようになりました。また預かりの時間でのおやつを自分で選択できることで子どもの判断で遊びが継続できるようになりました。さらに年長がおやつ配りの手伝いをする中で自覚や自信につながったり、シールノートを見ながら子供を呼ぶことで、字について認識を深めるきっかけになったり、おやつをとる子どもへの自覚を促すきっかけにも繋がっています。





## 「お列」「完全給食」としての課題・・・

子ども園になり、2時半に出るお列は各コースとも数人という状況。今後4時半出発のお列を検討するなど、子ども園としての「お列」をどう考えるか？大きな課題です。「歩くのがイヤ」「お迎えで」とお列に出ない子が増えているのも気になります。今後教育課程の一つでもある、「お列」をどのように捉えていくか？検討課題です。

前年9月から完全給食化により給食費改訂を行い、給食費の収支状況に一定の前進を得ることができました。半面、園外でのお弁当持参の活動やクラスごとのクッキングなどがとりにくい状況になりました。給食を現地に持ってきてもらったり、クッキングの日を給食日の中にクラスごとに事前に設ける（発注を止める）など、柔軟なやり方でそうした点を補っていければ、と思っています。

## <2> 年間行事の見直しと再編

### コロナ禍を活かしてこれからの行事へ・・・

今年度初めて、入園式をぐみ版と年少版の二段階方式で実施しました。ぐみはあっさりで終わることで長い時間、大勢の人間が集う式の間ずっといる必要がなく、本格的な入園式前のプレとして、保護者も全員で集まり顔を合わせる機会になりました。創立記念日はこれまでの保護者会総会とセットでの保護者もお祝いの場に招くことで親へのミニ発表会というくくりから外れたことが、純粋に園への誕生日を祝うという表現活動に特化できたことは大きな収穫です。保護者会総会が対面で行えない課題や親御さんが子どもたちのお祝い風景を「見たい」という欲求にはオンラインで対応しましたが、**創立記念日そのものの原点に立ち返った（歴史的に）**ありようが、子どもたち自身にもクリーンにヒットしたように思われます。

また運動会での地域開催は音響を業者に任せることで広いエリアでも運動会の音楽が聞こえやすく、世界を感じられる環境が用意でき、木の花音頭の大人版を生歌で踊るなどの斬新な演出もできました。（一方で犀川緑地ならではの近隣の課題、暑さ対策、同時期の芝刈りなども顕在化した課題も。）

木の花祭りは、神社の環境が子どもたちのモチベーションをあげる素材になった一方、木の花まつり、アフター版として、残り物を別日に預かり時間等に売る経験をやりたいという子らですること、限られた大人だけではない関わりが生まれ、他の子らもそういう場を見てまつりの品物などを見る機会にもなりました。商品への価値観を見出していた子らが立候補し、やりたい子中心なのでモチベーションが高く、続けてやりたいらしく、自分の店のモノ以外の商品への取り扱いや解説、セールストークを磨いている姿も見られるなど、店を続けていくことで子どもの学びの進化（深化）が伺えます。また年中児もアフターのお店に保護者と再び買いにいくなど、預かり時間帯を活用することで子ども園として就労する保護者にも「お店」体験を得る場にもなりました。



おのこり、延長預かりなどでまつりさんがお店屋さんを開店。

クリスマス会では、保護者限定（音楽サークルのみ）にすることで、適度な人数で見られる緊張感があり、年少には次の発表会本番の前に一つのステップになりました。サークル活動でのOB参加の意義については、そこまで人数を増やしてキャパをどう確保するか？という面と、異学年の親同士の交流、本当に

好きな大人たちが集まって演じることで子どもにとっての刺激、インパクトという面で、どうバランスを取るか？が課題も浮かび上がりました。

### <3> これからの保護者参画を考える

#### 土曜日企画のこれからを見据えて・・・

父レクは土曜日保育を行うことから今年度からイベントとして保育の枠組み（縛り）を外し、保険代として参加費をとりその中身を園主導で出すことでスムーズに取り組めることができました。父たちに中身を考えてもらっても、そうしたことに負担を感じる父親も多くなり、折角考えてもらっても、それってどうか？・・・とスタッフが思うことも多く、いっそのこと園からテーマを降ろす方が、子どもの現状の姿、やってみたいことをリアルに実現できるので、園にも親にもいい、とスタッフは実感。また父レクを通じて子どももおやじも異学年交流のきっかけになりました。ただおやじの会としてはもっと主導的にやりたいという思いも、父たちの中にはあり（特に年長）、そうした思いをどう汲み取るのか？また異学年ですることでのスタッフ間の調整、打ち合わせの負担もあり、こうした点のバランスのとり方が今後の課題です。

ビデオトークも昨年度同様、二学年混合の機会を作り、年長、年中の縦割りの中で、ビデオトークをきっかけに縦割りでのお店屋さんの活動を深める中で子ども同士の関りが深くなったり、またトークでは育ちの見通しなどが親にもわかってもらえたり、親同士も異学年交流ができ、また年長、年中の親の視点、意見の違いが見えてよかった、というスタッフたちの感想が得られました。一方、父レク同様、スタッフ間の調整、時間の捻出などの課題や参加者の固定化などの面も課題です。年中が1学期のグループ懇談の際にビデオトークを導入した際には、ほとんど親が参加したことを参考に、クラス懇談形式の中で簡易的なトークの場を設けるのも一考ではなかろうか？ 異学年同士の親の交流、育ちの違いや見通しの認識を深める場とクラス全体の保護者で理解を図る場の設定などを考慮したあり方などを検討したいと考えています。

#### 新たな試みとしてのサークル活動・・・

昨年度から園主導で始まったサークル活動。今年度も異学年の親の交流につながり、保護者の多様な発想が園生活にも還元されるきっかけにもなりました。コロナ禍の中で感染状況を注視しながらの活動期間に限定されましたが、サークル間のコラボも開催したり、土曜日企画でOGも入ることで縦の繋がりができたり、人との出会いの拡がりでも活動に幅が広がりました。また土曜日企画は、土曜日保育の子も参加できるような機会になり、土曜日保育の保育としての（子守ではなく）意味を感じることもつながっています。



土曜日開催の音楽サークル活動。手作り楽器を作ってみよう・・・。

しかしサークルメンバーがどのサークルにも掛け持ちであることでの活動日程、時間の設定の難しさ、職員（部長）の負担、駐車場問題など課題もいくつも浮上。そうした現状に、サークルによっては、先生なしでもいいよ、と言う自主的な集いで企画が進むケースも見られ、職員主導から保護者主導へとサークル活動がよりサークル的に回るような萌芽も見受けられます。より幅広い保護者の参加や保護者同士の繋がり、園への様々な主体的な参画、協働する在りようが生まれるような、保護者参画の仕掛けが今後も検討課題です。

## 4. 新時代に対応できる多様な協働的スタッフ体制の構築

### <1> スタッフ間の共有と連携

子ども園となりシフト勤務が日常になると、スタッフ全員での会議や研修が難しく、職員間の連携、共有が大きな課題となってきました。そこで**職員ラインの活用**を図り、職員全員に同じ情報を共有し、スマホのなかった園長もついにスマホを持たされたことで職員ラインに加入でき、全員の共有が可能になりました。また**毎日の終礼**は、職員同士が顔を合わせる機会として、また早番などの当番や駐車場などの確認事項とすることで**共有がスムーズになり、時間の区切りがつけやすく、帰宅しやすいきっかけ**にもなっています。また新たな試みとして、コロナ禍の感染状況悪化の際には職員会議などにZOOMを活用した会議で情報を共有するなど新たな可能性も示唆する試みも行ってみたり、ささやかながら、職員交流をオンラインでの飲み会や感染状況が落ち着いた時期に対面での希望者による親睦会などもでき、職員間の親睦を図る機会になりました。

### <2> 働き方改革の課題改善

また子ども園になることでの保育時間の長時間化、預かり時間帯の保育人数増、未満児保育など幅の広い保育活動などの職員負担の軽減に関しては、例えば、キッズビュー等のICTを活用し、**アイパッドで保護者による登園、降園のチェックでの負担軽減**を図ってみたり、オクレンジャー、絵本など担当分担などで特定の人への負担軽減と職員間の共有を図ったり、当番に関しても、早番（早二番）・遅番（遅二番）の二人体制や預かり保育での曜日での学年担当など、**安心感と分かりやすさ、打ち合わせ時間の確保、調整もしやすくなりました**。

ノーコンタクトを補完するサポーターは今年度も追加募集を行い、人数のすそ野を広げる一方、経験を積んだサポーターの方々も、慣れてきたのか、正規スタッフと保育の話をする機会が増えてきました。また**サポーターさんが持ち込む遊びが広がる（泥団子、こま回しなど）場面や、サポーターの持ち味を生かした保育**ができてきたり（運動会やクリスマス会などの楽器の伴奏など）、ぐみ棟でも材料を持ち込んでオーナメントづくりなどを楽しむ様子も伺え、子どもたちに刺激を与えています。しかし、サポーターさんが日替わりで変ることでの保育の継続性を十分持ちえなかったり（特に行事の取り組みなどで）、大人の手が多すぎて子どもが出来ることまで大人が知らず知らずのうちに介入してしまったり、一方でノーコンタクト時に午後以降の遅めの時間帯に十分なサポーターが補填できなかったり、課題も山積です。

### <3> 人材育成と保育の継承

経験年数の長いスタッフが多い一方で若い先生も増え、世代交代、保育の継承が将来的な展望の中で大きな課題です。職務分掌企画提案書を経験年数に応じて一定数の職務・職責を担い、同時に処遇改善加算とリンク、

職務分掌における各分担をキャリアアップできるシステムを今年度も継続。年間を通じて研修を各自取りつつ、職務・職責のスキルもあげて、キャリアアップできる仕組みづくりを試行中です。

園内研修としては、今年度は**3年目を迎えたサポーターさんも交えた正規スタッフとの合同園内研修を学期に1回持ち、特別支援の子ども理解の情報共有をもつ機会**を設けてみました。木の花が考えるインクルーシブ教育・保育の在りようをサポーターさんは日常的に体験しつつも、自身で納得して咀嚼できているか？という素朴な疑問も

保育アシスタント、サポーターさん含めた合同園内研



色々あるかと思われま。そうした率直な疑問にも応えつつ、映像を活用して子ども理解について、正規スタッフも試行錯誤、その本質をつかむために様々な情報を共有し、子どもの姿から学び取りたい、という想いを伝え、疑問、不安も出し合い、語り合う場を設けてきました。今後もこうした積み重ねを経て、多様な子どもたちが安心・安定的に過ごせると同時に、彼らにとっての学びの芽を摘み取らないような大人の入り方を、サポーター含めて共有していく必要性を改めて実感しています。加配ではない、多様なサポーターの存在を活かす人的配置、活動の在りようが今後の保育の鍵でもあると思われま。

また映像を活用したインリアル研修はぐみでのインリアル分析も継続的に実施。参加したぐみの先生からは勉強になる、こんな思考力、創造力などをぐみの子らも発揮していることが分かって驚き、結果保育につながっている・・・などの感想が寄せられました。彼らもそうですが、ぐみ、という幼児期以前の子どもの行動分析をすることで、子ども理解をもう一度原点に立ち返って行く意義を再確認できたようです。

なお世代別研修では、昨年度の課題から年齢構成をシャッフルし、異世代間の話し合いの場を持ち、普段聞けない話など気軽に聞けたり、話せる環境で行ってみました。各先輩からの数々の失敗談を笑い飛ばし、若い世代に「保育に失敗はないよ・・・」という想いを伝えられたか？まだすぐに答えはできませんが、こうした「不要不急」でない語らいの場の重要性も実感したところです。(2021年度『園内研修一覧』注2)

またコロナ禍の中でも状況が落ち着いている時期には対面型の研修、感染状況悪化の際にはオンライン等を活用した園外研修も各職員のテーマ、課題に即して実践を重ねており、そうした蓄積を自身はもとより園にも還元してはいるものの、時間的な余裕もなかなか取れないことと相まって、まだ全体への共有、浸透には課題が残ります。(2021年度『園外研修一覧』注3)

子どもの園としての事務負担の増加、ICT導入故の負担感(キッズビューを信用していいのか?)、会議の時間、中身でメンバー限定など、会議構成のメリハリ、ノーコンタクトの調整、確保の難しさ、情報共有や指導計画や育ちのノートなどの書き物などの職員負担の軽減をどう図るか?という課題もまだまだ残っています。写真など活用しもっともっと柔軟で使い勝手のいい指導計画や記録のつけ方を工夫する一方、サポーターが多すぎることのマイナス面、あるいはどこまで頼んでいいのか?遠慮してしまう関係性、保育の考え方で世代間ギャップ(なぜこうするのか?伝えきれていない)、子ども主体の、遊びの面白さを追究する木の花の保育の組み立て方、日常と行事との関係、自由遊びと活動との関係など、経験を積みながら体得してきた先輩世代が何気なく進めている保育を、如何に若手に無理なく伝えていくか?対話を図りながら整理をしていく場を会議だけではなく、日常的な雑談の場などの中で創っていくことも重要です。木の花らしさの「これまでの」という想いを断ち切り、若手がやってみたいことを開花できる環境をどう作るか?などまだまだこれからの時代に対応できる多様で協働的なスタッフ体制作りは道半ばです。学校評価での年間の振り返りを職員全体で行う中で(2021年度『観点別自己評価結果 注4)、また、関係者の方々からのアドバイス等も職員で共有し、一つ一つできるところから今後も取り組んでいきたい、と思います。(2021年度『学校関係者評価結果』注5)

### 結びに代えて

コロナ禍も2年を経て様々な知見を得て、ワクチン接種、治療薬の開発なども進み世界的パンデミックからエンデミック(地域感染)へと仄かにその出口の先が見通せるような状況も生まれています。とはいえ国内においてはワクチン開発もまだ国産化には遠く、季節型インフルエンザ程度にまで落ち着くにはまだ時間がかかりそうですが、徒に恐れず、かつ安直に無防備にもならず、コロナとの共生を図りながら、子どもにとってどうなのか?を第一に木の花暮らしを安定的に来年度も続けて参りたいと思います。